

自立と依存：「自立した個人」の虚実

浜 野 研 三

“Riley, we are pilgrims in an unholy land.”

Boondocks by Aaron McGruder

ネオ・リベラリズム的政策が世界的に推進される中で、日本においても「自立した個人」という言葉が様々なところで用いられ、流行のスローガンのようである。社会の健全な発展のために自立した個人の存在が不可欠であることは言をまたない。しかし、この概念は魅惑的である故、より一層正確な理解を必要としている。なぜなら、魅惑的な概念はその用い方によっては、きわめて悪い影響をもたらし得るからである。本論文は、ウィットゲンシュタインやデイヴィッドソン (Donald Davidson) やブランダム (Robert Brandom) の説、そして心の理論の理論 (theory of theory of mind) を援用しながら、アネット・バイアー (Annette Baier) やエヴァ・フェダー・キテイ (Eva Feder Kittay) などのフェミニストの哲学者の議論を紹介し、「自立した個人」なる概念の虚構性を示すとともに、その概念が含意している魅力的なあり方の実現の方策について示唆をなす事を目的としている。本論文の鍵となる概念はケアと依存である。自立なる概念はケアと依存の概念との不可分な関係の理解抜きにはその十全な理解を得ることはできない。まず、バイアーの議論を紹介し、人間の本質的な他者依存性を論じ、次に、キテイの議論を紹介しつつ、依存の事実をふまえた人間観の一つのあり方を示す。そして、そのような人間観から生まれる自立を達成する方策、ネオ・リベラリズムの方向とは異なった方向を目指す方策、を示唆して結論とする。ただし、紙幅の関係で素描の域を出ないこと

をお断りしておく。

I. ケアと依存：バイアーのパーソンについての自然主義的な見方

バイアーは女性の経験を踏まえた立場から議論を展開する。そのことは、他者をケアする事をその主要な役割と見なされている存在の観点を見失うことなく問題を考えることを意味している。また、ケアの必要を生み出す依存という事実を目を向けることを意味する。当然のことであるが、多くの場合ケアする人の存在はケアに依存せざるを得ない人の存在を前提としているのである。母胎内、誕生後から独り立ちするまでの時期、そして病気や障害を理由とする場合など、われわれ人間が様々な形で他者のケアを必要とする依存性をその本質的な属性として持っていることは明らかである。このことは、有限な傷つきやすい身体を持つ動物である人間にとって誰もが認めざるをえない基本的な事実なのである。しかし、その明白な事実が哲学の中で正面切って取り上げられ、その意味が詳しく論じられることはあまりなかった。そのような欠陥を改めるフェミニストの動きの中心にあった哲学者の一人がバイアーである。

バイアーの立場を明確に表す言葉に次のようなものがある。「われわれのパーソンとしての自然な住処は他のパーソンの間である。(Our natural habitat, as persons, is among other persons.)⁽¹⁾」われわれはなによりもまず、他のパーソンの子供として生まれ、他のパーソンに養育されることを通して自らパーソンとして認められるような反応のあり方を身に付けてゆくのである。われわれの誰も、誕生から一定の相対的自立性を身に付けるまで自分をケアしその過程でわれわれの言語習得、世界についての様々な知識、そして色々な場面での振る舞いの規則の習得を助けてくれる他のパーソンの存在なしでは、パーソンとしての身分を確立することはできない。その意味で、「パーソンは本質的に 2 番目のパーソンであり、他のパーソンとともに成長するのである (Persons essentially are *second* persons, who grew up with other persons.)⁽²⁾」というバイアーの言葉はきわめて含蓄に富むものである。バイアー

は、われわれが他者の言語の規範に基づいて言語を習得してゆくことを指摘しているが、ウィトゲンシュタインが私的言語批判で明らかにしたように、言語の習得には他者による批判的な反応を必要としている。他者による肯定的あるいは否定的な反応に反応することを通してわれわれは次第に言語を習得するのである。このような信頼している他者による反応を通して、規則に従っていると自分が考えていることと、実際にその規則に従うことの区別が成り立ち得るようになるのである⁽³⁾。この過程をデイヴィッドソンやブランドム⁽⁴⁾の説を生かしながら敷衍すれば次のようになるであろう。

われわれの言語習得を可能にする他者とのやりとり・コミュニケーションが成り立つためには以下のような条件が満たされていなければならない。まず、批判的な反応をなす他者は、われわれを自分と同様な存在として認めてくれていることが第一の条件である。そして、その他者の反応に的確に反応するためには、言語を習得中のわれわれの側にも他者を、その反応を真面目にとる必要がある存在、その意味で、一定の敬意を払うべき存在として認めるという態度が存在していなければならない。むろん、言語習得の初期の時点において、われわれは明確な自己意識も、したがって、明確な他者意識も持っていないが、明確な自覚の下にはないにしろ、他者に対する一定の態度が不可欠であり、実際にわれわれはそのような態度を持っているのである。したがって、言語習得が成り立つためには、学ぶ者と教える者との間での、潜在的なものであれ、相互の承認が不可欠である。

ところで、言語を教える側は、学ぶ側が自分と同じ世界に住み同じ事象について正しいあるいは誤った仕方で反応していること、誤っている場合には、単なる模倣の不十分さによる誤りとともに、相手が誤った信念・理解を持っている故の誤り等の形で、相手の誤った言語行動を解釈し、正しい言語行動へ導くための方策を採らねばならない。同様に、学ぶ側も、自他の区別も明瞭ではない時期を経て次第に自他の区別の理解が生まれてくるにつれて、教える側の行動の解釈を行いつつそれに応じた適切な行動を目指すようになるのである。

ここで、自己の成立を考える際に興味深い示唆を与える理論として、心の理

論の理論（theory of theory of mind）を思い出してみよう⁽⁵⁾。この理論によると、人間は相手の振る舞いから相手の心の状態をある程度の正確さで読みとるための理論装置を進化の過程で身に付けており、それが、通常の発達過程の中では3才と4才の間で機能を発揮するようになるというのである。この決定的な変化を経て、われわれは他者の反応・行動を単に世界のあり方によるだけではなく、その世界が他者にいかに見えているか、言い換えると、他者が世界についてどのような信念・理解を持っているかを考慮した上で理解し、予測することができるようになるのである。ここに、他者が独自の心を持ち独自の眼差しを持って世界を眺め理解している存在として理解されるのである。まさに、厚みを持った立体的な存在としての他者との出会いがここで初めて成立すると言ってもよいであろう。しかも、厚みを持った真の意味での他者の存在の明瞭な自覚なるものは、それに対応する明確な自己の自覚の成立をも意味している。このような心の理論が実際に生得的なものであるか否かについては、それを巡る論争に決着が付いていないが⁽⁶⁾、生得的であれ後天的に発達過程で身に付けられるものであれ、その出現には上で述べた他者との潜在的な相互承認を前提とする相互作用が不可欠なのである。このように、他者との相互承認の関係が、したがって、他者への依存が、言語の習得、明確な自己意識の形成、他者との真の出会いとその理解等、われわれのパーソンとしての成熟にとって根本的な役割を果たしている。まさに、人間は他者との相互依存を自己の存立の基盤に持っている存在なのである。単なる自己の生理的な存在の維持のためだけでなく、われわれは他者との相互依存・相互作用の事実をより深くその存在の核の内に持つ存在なのである。ペイアーの「パーソンはすべて2番目のパーソンである」という言葉はそのような本質的な依存性を示しているのである。

以上の議論では、他者への一方的な依存の関係の存在とともに、他者との相互依存の関係の本質的な重要性を強調したが、この端的な人間に関する事実から目を背けた仕方では用いられ得る「自立した個人」なる概念は、まさに社会的に構築されたものであると言わざるを得ない。

ここで強調されるべきことは、このような社会的歴史的な産物である「自立した個人」なる概念は、本質的な依存性を持っている動物である人間の実際の姿に合致しない虚構性を持っていることである。この概念は実現を目指すべき努力目標としては大いに意味があるが、他方、それが特定の利益の擁護のために用いられる場合、悪しき意味でのイデオロギー機能を発揮してしまうおそれがある。その意味でも、われわれは今一度、人間の根源的な依存性の事実を心に刻まねばならない。それを踏まえての相対的な自立性を目指す試みがなされねばならないのである。そのような反省を経た上での自立した個人の形成の呼びかけは大いに奨励されるべきである。しかし、現状では、そのような理想とは裏腹に、いわゆる社会的に不利な状況におかれている人々への援助の手をさしのべることを拒否するための口実として用いられる場合が少なくない。したがって、自立した個人の称揚がどのような文脈の下で、そしてそれが実際にどのような社会的な結果を生みだしているかを検証することなしに、ただただその概念の理想的な含意のみに注意を向け、その実際の機能を見逃すことがあってはならない。この点については、個人の自由と責任を標榜するネオ・リベラリズムを理論的支柱とするグローバリゼーションが実際に生み出している現実、たとえばサブコマンダンテ・マルコスをスポークスマンとする EZLN（サパチスタ民族解放戦線）が蜂起せざるを得なかった現実と彼らの今も続く困難な闘いを思い出すべきである⁽⁷⁾。それ故、次に、キテイの議論を参照しながら、自立した個人なる概念に対するバランスのとれた態度を探ることにする。

II. キテイのパーソン論

キテイは重度の知的障害を持つ娘（セーシャ：Sesha）の母親である。セーシャはすでに 30 才を越えている。彼女が生まれたのはキテイが哲学科の大学院生の時であり、知的な生活に大きな喜びと抱負を持っていたときであった。彼女によれば、その後のそのような重度の知的な障害を持つ子供を育てる経験

は彼女をより謙遜な哲学者にしたと述べている⁽⁸⁾。そこで彼女が得た洞察は以下のようなものである。

1. 知的能力を人間が人間たる所以を形成する核となる性質であるとする考え方に対する疑問。

彼女の経験を考慮すると、納得できることであるが、キティはケアの倫理を中心に道徳を考えて行く道をとる。ケアの倫理においては具体的なケアの対象との関係が重視される。抽象的な個人ではなく、自分がケアする今・此処に存在する具体的なケアの対象の生活の質に大きな関心を寄せるのである。抽象的な生活の質や生命の神聖性にのみ関心を払い、ケアを受ける人の実際の関心や必要への注意をおろそかにしてはよきケアをなすことは不可能である。ケアの倫理においては、具体的で豊かなコミュニケーションに基づく関係を作り上げることが第一に要求される。通常、生活の質の内容について、多くの哲学者や医師は知的能力の役割に特権的な地位を与えがちであり、喜びを経験したりそれを与えたりすることが、よりよい生活の質のリストの内に挙げられることは稀である、とキティは知に偏向した人生観、幸福観の狭さを批判する。ここでキティが考えている喜びとは、単に高度の知的能力を発揮することによって得られる喜びだけではなく、愛情にあふれた抱擁やキス、好きな歌に合わせて手をたたくこと、自分をケアしてくれる人や両親に大きな喜びを与えること、そしてそのような形で言葉なしに愛を教える、ことからなるよき生活の質をも含んでいるのである。このような喜びの源は他者との愛情に満ちた関係である。

キティは、哲学者の道徳に関する通常の議論が、つながりを持つ具体的な個人の実際の生活のあり方を抽象している、と強く批判するのである。

2. キティはピーター・シンガーやマイケル・トゥーリーなどが提出した自己意識の能力を重視したパーソン概念に代わるパーソン概念を提出する。

このキティの代案はきわめて興味深いものである故に、少々長いが彼女自身

の言葉を引用する。

われわれが他者との関係の内にそしてそれらを通してわれわれ自身をパーソンとして理解するように、われわれは関係の内にそしてそれらを通して他者をパーソンとして理解するようになるのである。しかしそこでは、関係はもはやわれわれが実際に関係を結ぶ人々だけに限られはしない。この拡張は、適切な仕方です、すなわち、その可能性がわれわれ自身の可能性でもあるようなすべての存在に拡張される仕方ではなされる、と私は提案する。私が持つ諸々の関係を、彼らの置かれている状況を私自身の可能性とみることができるような他者に、想像力を働かしつつ拡張することが、われわれとすべての人間とのつながりをみることに（唯一ではないかもしれないが）決定的に重要な動きである⁽⁹⁾。

キティはこのような仕方での人間をパーソンとして扱うことを認める。ここで道徳的な想像力の働きが肝要である。道徳的想像力を発揮すれば、人種、性、年齢、宗教、能力、を越えて他者の状況を自分にとって可能なものとして想像できるという関係に立ちうるのである。交通・通信の発達の中で様々な形での記録によって、遠く隔たった土地に住む人々や異なった文化や伝統を持った人々についての理解が深まるにつれそのような想像力の射程は大きく広がってきていると言ってよいであろう。キティは、このような立場から同じ種に属することの道徳的な意味を肯定するのである。キティは道徳的想像力を駆使することを通して形成される関係、いわば、同一視の可能性という関係によってパーソンを規定することによって、パーソンの範囲を重度の障害者を含む形に拡張する。このような規定は、シンガーなどのパーソン概念のように、特定の能力の組を持っているか否かでパーソンかパーソンでないかを決める立場とは異なったパーソンの集合を作り出すことを意味する。他の動物の場合には、知的な能力の面では幼児や重度の知的障害を持つ人々と変わらない場合でも、キティの基準によるとパーソンとは見なされないし、人間以外の高度の知的能力

を持つ動物以下の知的能力しか持たないと見なされ得る人々もパーソンと見なされるのである。

このキテイの立場に対しては、まず自分や自分の周りの人々をパーソンのプロトタイプと見なし、それらについての一定のイメージに基づく道徳的想像力による拡張を行うことを中心にしているが、それはやはり自己中心的、人間中心的なものである、という批判があり得る。しかし、人間が、そのような自分の具体的な生活の実践から出発せざるを得ないのはある意味で避けがたいことである。パーソン概念に限らず、すべての概念は人間の社会的実践の中から生み出されたものであることの意味を今一度思い起こすべきである。何らかの仕方では概念がすでにあつて、その理解に従ってわれわれの行動が生じるのではなく、われわれが一定のパターンの反応を共有するという事実から概念が生まれてくるのである。概念から行動ではなく、行動から概念へ、そして、そのような概念の自覚化・洗練化というのが概念に基づく行動の生成の順序である。ウィトゲンシュタインの言う通り、初めに言葉ありきではなく、初めに行動ありき、なのである⁽¹⁰⁾。そして、同じくウィトゲンシュタインが述べるように、われわれが魂への態度をとるのは、魂の概念をすでに持っていてその概念に照らして、相手を魂を持つ存在として扱うのではなく、人間は通常、他の人間に対して魂を持つ存在として扱うような傾向性を持っているのである⁽¹¹⁾。これは、心の理論が明確に現れその機能を発揮するまでもなく、たとえば、よく知られている事実であるが、新生児が人間の顔に似たものに特異的に反応することにみられるように、人間は他の人間に対して自然に他の動物に対するのとは異なった態度をとるのである⁽¹²⁾。人間はこれに類する基本的な反応様式を基盤にしつつより複雑な認識と行動の体系を築いている。その中で、基本的反応様式の一部が改変されることもあり得るが、そのすべてが捨て去られることは考えられない。とにかく、今までのところ道徳の基盤にあるような他の人間に対して魂を持つものへの態度をとるという基本的傾向性は、それを捨て去るべき十分な理由がない。このような人間の認識や行動能力の発達のあるあり方を考慮すれば、キテイの立場は人間の認識のあり方に即した、きわめて妥当なものであ

ることができる。

キティはまた、人間の依存の事実に基づいて、自立性の概念などの改変を提案する⁽¹³⁾。たとえば、自分で服を着替えることに大きな困難を持つ障害を持つ人が、外出前に何時間もかけてやっと誰の助けをも借りずに自分で服を着替えることができることをその人の自立性達成の一つの目標としてたてない。ケアする人の助けを得て短時間で服を着替えて外出し、自分がしたいと思っている様々なことに余った時間を振り向けることの方がより自立性を達成している、と考えるのである。実際、われわれは通常多くの仕事を秘書やマネージャーに任せている人をそのことだけを根拠として自律性に欠ける人として低く評価することはない。生活全体の質の豊かさの確保が目指すべきものであり、限定なしにただただ誰の助けも借りないことを持って自立の達成と考えるのは、まさに人間が他者に依存せざるを得ない存在であるという人間の本質的な依存の事実を忘れたところに成立する、「自立した個人」という虚構の悪しき名残であるということができる。以上のようにキティはシンガー等のものに代わる新たな自立したパーソンの像を提供するのである。

III. 目指すべき自立：本質的な依存性を前提とした自立

これまで人間の本質的な依存性について強調してきたが、それは、「自立した個人」という概念が全く無意味かつ有害無益な虚構であると主張するためではない。それどころか、われわれの概念体系の中で、したがってわれわれの生活の中で、適切な位置を与えられたとき、この概念はきわめて貴重な役割を果たし得る。逆に、世界の現状はこの概念にそのような積極的な役割を果たさせるための社会の変革を要請しているのである。私が言おうとしているのは次のようなことである。

人間は根本的に壊れやすく傷つきやすい肉体を持った動物であり、文字通りの自立などを達成することは不可能であり、あくまで他者に対する依存の事実から逃れることはできない。しかし、そのような依存に事実を踏まえながら

も、相対的な自立を達成することは可能なのである。実際、この国際的な経済的相互依存関係の網の目の中で生きているわれわれの多くは通常の限定された意味での自立を達成して生きている。しかし、その自立の実際の内実を批判的に眺めてみるならば、様々な形で従属に耐えながら生きていることが明らかになることであろう。たとえば、経済的な自立といってもそれは不本意な仕事にしがみついたり、理不尽な行為を強いられながら獲得されたものであるかもしれない。具体的に言えば、新聞の社会面を賑わしている記事が示しているような、会社のためという美名の下に違法行為を犯すことによって得られた経済的自立であるかもしれないのである。そのような自立はいわば自由を犠牲にして得られた自立というきわめて逆説的なものでしかない。逆に、いたずらに他者のケアに頼ることなく、様々な社会的なケアによって自分が発揮できない機能を補いながら自分の意向に沿った形で与えられた可能性を十分に発揮し、充実した生を送る人の生は自立した生であると言えることができるであろう。大切なのは自立の内実であり、その内実に実質的な内容を与えることができるように、社会のシステムの改変を試みることである。

実際、本質的な依存性を持った人間という動物の自立は、いわば、正しい種類の依存をその不可欠な要素として持っているのである。われわれが正しく明快な言葉を用いて自立的な思考をなし、それを公的な議論の場で表明しながら、国家権力などの様々な権力による結論の押し付けを排して自立的な市民としての意志決定を行い、それを政策として実行する政府を作ることができるためには、そのような能力や態度を形成するための、数多くの他者、そして他者との共同の下で作り出している多様な制度の支えが必要である。重要な問題についての自立的な判断を可能にする、信頼できる情報の提供が確保されるシステム、訴えに対して迅速かつ納得できる判決が下される司法システム、市場競争に勝ち残ることを至上価値とするものではなく、自由な知的探求が奨励され、それを助ける多様なメニューが用意されている教育システム、市場機構の役割を十分に評価しながらもそれを絶対視することなく、それを生活全体の中での適切な位置に置くシステム、それは真の意味で社会に貢献することが実感

できるような労働と生産のシステムを含むであろうが、等々の構築を必要としているのである。自立した個人の出現を望む者は、そのようなシステムを作り出すことに努力することをそれこそ自己の責任として引き受けねばならない。自立を支える装置を強化することなく、いや自立を支える基盤を掘り崩すような政策を推進しながら、自立した個人の自己責任を謳い、その基準に合致しない人々を無責任な、個人の名に値しない存在として切り捨てるような言説は、まさにためにする議論であり、厳しく批判されねばならないであろう。

自立を助ける制度やそれを機能させる他者の支えによって、自立した個人が出現するのである。キティの娘であるセーシャが彼女なりの仕方ですべての生を送り、彼女の両親や周囲の人々に喜びと、従来の知性中心のものとは異なった人間観を示唆するような人生を送っているのも、彼女の両親を初めとする様々な私的そして公的支援への依存によって可能となっている。正しい依存との相互依存の下に目指すべき自立も実現し得るのである。自立は依存的理性的動物 (**dependent rational animal**)⁽¹⁴⁾の依存と必要と自立への欲求の間の動的な相互依存関係の下に生み出されてゆく。この関係は、言葉の意味や人生の意味など、意味を求め鳥が巣を作るように意味を作り出す動物である人間が、自分から独立した世界の中で生き残る必要とその生を充実したものになりたいという欲求を相互に調整しつつ、言葉やそれが表現する概念の意味や生きる意味を作り出してゆく過程の内に見られる関係と類比的である。このような過程の歴史的産物としてわれわれは存在し、日々の生活の中で新たな歴史の物語を紡いでいる。人間はまさに本質的な依存性を持ちつつ歴史の中で相互依存の下に限定された意味での自立を達成しながら、様々な意味を作り出す社会的動物なのである。世界中で貧富の格差を拡大する歪んだグローバリゼーションが進展する今、特定の階層の利益にのみ資する言説の中に現れる、自立的な個人という現実から遊離した抽象的な人間像に惑わされることなく、人間の現実のあり方に即しそれが含む豊かな可能性の開花を可能にする社会体制の構築を目指すことの必要性がいよいよ高まっているのである。

注

- (1) Baier, Annette C., “A Naturalist View of Persons” in her *Moral Prejudices*, Harvard University Press, 1995, p. 326. なお、「パーソン」という語は生物学的概念である「ヒト」特別された道徳的人格を表すものとして用いられている。ヒトとパーソンの関係については様々な議論があり、論争が続いている。「道徳的人格」ではなく「パーソン」とカタカナ書きするのは、カント的な形而上学の残滓を嫌ってのことである。
- (2) Baier, Annette C., “Cartesian Persons” in her *Postures of the Mind: Essays on Mind and Morals*, University of Minnesota Press, 1985, p. 84.
- (3) Wittgenstein, Ludwig *Philosophical Investigations*, Macmillan, 1963 を参照。
- (4) たとえば, Davidson, Donald *Subjective, Intersubjective, Objective* Oxford University Press, 2002, Brandom, Robert, *Articulating Reasons: An Introduction to Inferentialism*, Harvard University Press, 2001, および Brandom, Robert, *Tales of the Mighty Dead: Historical Essays in the Metaphysics of Intentionality*, Harvard University Press, 2002 に収められている論文を参照。
- (5) Baron-Cohen, Simon et al., eds., *Understanding Other Minds: Perspectives from Developmental Cognitive Neuroscience*, the second edition, Oxford University Press, 2002 を参照。
- (6) Karmiloff-Smith, Annette et al., *Pathways to Language: From Fetus to Adolescent*, Harvard University Press, 2001 を参照。
- (7) Kingsnorth, Paul, *One No, Many Yeses: A Journey to the Heart of the Global Resistance Movement*, Simon & Schuster, 2003 の第一章を参照。
- (8) Kittay, Eva Feder, “Rationality, Personhood, and Peter Singer on the Fate of Severely Impaired Infants”, *Newsletter on Philosophy and Medicine*, APA Newsletter Spring 2000, Vol. 99, n. 2
[http://www.apa.udel.edu/apa/publications/newsletters/v 99 n 2/medicine/article-kittay.asp](http://www.apa.udel.edu/apa/publications/newsletters/v%2099%20n%202/medicine/article-kittay.asp)
- (9) *ibid.*
- (10) Wittgenstein, Ludwig, “Ursache und Wirkung: Intuitive Erfassen (“Cause and Effect: Intuitive Awareness”)”, in Kluge, James et al., eds., *Ludwig Wittgenstein: Philosophical Occasions: 1912–1951*, Hackett, 1993, §21–10.
- (11) Wittgenstein, Ludwig *Philosophical Investigations*, Macmillan, 1963, p. 178
- (12) 幼児の能力の詳しい説明は, Gopnik, Alison et al., *The Scientists in the Crib: What Early Learning Tells Us about the Mind*, Perennial, 1999 を参照。
- (13) Kittay, Eva Feder, “When Caring is Just and Justice is Caring”, in Kittay, Eva Feder, et al., eds., *The Subject of Care: Feminist Perspectives on De-*

pendency, Rowman & Littlefield, 2003, p. 267.

- (14) この言葉は MacIntyre, Alasdair, *Dependent Rational Animals: Why Human Beings Need the Virtues*, Open Court, 1999 によっている。

——文学部教授——